

CURES NEWSLETTER

地域経済
ニュースレター

1991.9.20 No.20

卷頭言

「牛・馬」と「蜂・蟻」のあいだ

林 宥一

1. 私が専攻の対象とする時代（第二次大戦前の日本）では、苦役としての労働は「牛馬ノゴトキ」などと比喩されることが多い。その生活を「獣類」にたとえることもある。いずれにせよ比喩の対象動物は哺乳類である。「半隸奴的労役」という有名な規定もある（山田盛太郎『日本資本主義分析』）。この場合も、「隸奴」という形容の中身は哺乳類に属するホモ・サピエンスである。

2. それに対して、現代の日本人の働きぶりは、かなり前から周知のように「働きバチ」として、最近ではフランスの首相の命名により「働きアリ」として、膜翅目の昆虫のそれに形容される。比喩的形容であるからさまざまな違いがあるにせよ、現代日本の「会社主

義」のもとでの労働者を蜂や蟻にたとえるのは、この労働者が外的に強制されるかたちではなく、習性的な労働強制装置を内部にはめこまれたかたちで「会社主義」の主体としてたちあらわれているという点において、少なくとも「牛馬（又は隸奴）ノゴトキ」という比喩よりは適切である。「強制された主体性」という形容矛盾をともなう性格規定が行なわれるゆえんであろう（熊沢誠『日本の経営の明暗』、馬場宏二『現代世界と日本会社主義』『現代日本社会1 課題と視角』など参照）。

3. もとより人間は「牛・馬」ではなく「蜂・蟻」でもない。しかし、それが比喩的形容の次元のことだとしても、この両者の間には動

■ 卷頭言	林 宥一
■ CURES Report		
「石川県でのゴルフ場問題」	大月 史朗
■ CURES Salon		
「経済発展の質と都市の成長管理政策」	碇 山 洋
■ Topic		
「ヤマザクラのススメ」	鈴木 三男
■ Information Processing		
「30円で買える学術情報」	橋 洋平
■ 地域経済文献情報		

物分類学的にみてあまりに大きなちがいがある。このちがいは何なのか？そして、前者から後者への変化は、一体、いかにして生ずるに至ったのか？この問題を歴史学の問題として分析してみると（換言すれば、日本近現代史の過程で「働く人々」の世界にどのような主体的变化が起きたのか、ということ）——それ自身比喩的言い回しだか、これが私の現在の問題関心の一つである。

4. この場合、産業部門や労働形態の差異など、前提として議論しておかなければならないことがたくさんある。だが、ここでは、社会構造が変化すれば労働觀も変わるというごく単純なことだけを強調しておく。というのは、このあたりまえな視点そのものが、日本人にとって勤勉がいつの時代にあっても美德だったとか、現代日本の「繁栄」を支えたのは近世・近代を通じて形成された日本型勤勉精神だったとかする、超歴史的な俗説により事実上否認され続けているからである（たとえば、日本経済新聞社編『ゼミナール 日本経済入門』などをみよ）。

5. だが、日本近現代史の民衆世界に少しわけ入ってみればわかることだが、この俗説はさまざまな意味で成り立たない虚像である。たしかに「オブローモフ主義」のごとき懶怠が正面きって美德とされたことはない。しかし、このことは勤勉が常に人々の生活を律する徳目だったことを意味しない。働きすぎがかえって「何て欲張りだ」という悪評をこうむり疎んじられる要因となったことは、第二次大戦前の農村社会でしばしばみられたことであった。また、近代日本社会において広汎な人々をとらえた最も日常的な生活規範＝実践・倫理としての勤勉・儉約・謙讓なども、それらの諸徳目が不可分に結びつき相互に補い合うものとして「通俗道德」という民衆意識を形成していたのであって、決して勤勉の

みが分離してひとり歩きしていたわけではない（安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』）。勤勉が儉約と一体となっていたという一点をとっても、それが現代日本人の価値觀と異質なものであることは明白である。いずれにせよ、ひとまず強調しておかなければならぬのは、現代日本の「働きバチ（又はアリ）症候群」と称されるような労働者群像を直ちに第二次大戦前の民衆世界のあり方に求めるのはムリがあること、後者はすぐれて現代的な特殊日本的な企業社会構造の産物であるということである。

6. しかし他方、近代日本における広汎な民衆の自己形成・自己鍛錬の規範としての「通俗道德」の世界から現代の「会社主義」のもとでの民衆世界への転換が、ある日突然生じたわけではないことも確かである。変化の諸段階が存在するはずであって、それをつきとめるのは歴史家の仕事だと思う。第二次大戦前に限定すれば、この変化の最初の重要な画期は、第一次大戦後の世界史的変動を条件とし、社会的同権化の潮流を前提とし、日本社会内部に新たな民衆社会の端緒が形成される両大戦間期である。この時期には、勤勉・儉約・謙讓・孝行といった一連の「通俗道德」が民衆世界において自己分解をとげ始める。家父長的権威の動搖、農村における地主制の後退と自立的農民の登場、社会的同権化の前進、農村から都市への激しい社会移動、教育水準の変化などを条件とし、「下層社会」内部で大きな変動が促され、従来とは異なるレベルで社会的上昇欲求や立身出世主義や競争が生まれ、民衆はそれまでの「通俗道德」とは異なる規範をもち始めるのである。

私が両大戦間期の日本に注目するのは、この時代が日本の「近代」と「現代」をつなぐ最も重要な環であると考えるからである。

（金沢大学経済学部教授）